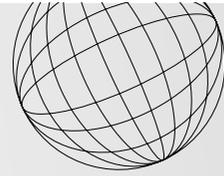


# 世界をみつめて2

## 映画

元山 千歳



中学生の頃、と言うともう 40 年いじょうも昔のことなので時の流れの素速さに背筋が寒くなるのだけれど、あの頃はどうかや学校主催の映画鑑賞タイムがあったらしい。近くの映画館で『誰が為に鐘は鳴る』を見たときの感動、というか見終わって映画館をでたときの白々とした街の風景への失望感、というような感じをいまでもよく覚えている。

『誰が為に鐘は鳴る』はアメリカの文豪ヘミングウェイの小説で、第二次世界大戦中の 1940 年に出版、1943 年に映画化された。舞台は 1937 年のスペイン内戦。正義と自由という大義のもと、アメリカの大学教授ロバート・ジョーダンはゲリラに身を投げ反乱軍と戦うなか、マリアに出会う。しかしいまや敵の激しい襲撃。マリアを愛し守ろうとするジョーダンは死を覚悟で一人敵と戦う。

田舎町の中学生だったボクには、この映画と同年の 1943 年に『カサブランカ』がアカデミー作品賞を獲得したことや、この時期に制作された映画の 3 分の 1 がなんらかの仕方でも戦争をあつかっていて、つまり戦中のアメリカは、戦う美学を戦略的に讃えていた、というようなことはまったく知らなかった。

マリアを守るために命をかけた男ジョーダンの格好良さ、だけがボクには問題だった。このままジョーダンの側にいたいというマリアに、男は一人で戦わなければならないときがあり、マリアが生きのびるなら、それはボクも生きることなんだ。だから二人のために行くんだ、と言ってマリアを説得し、朦朧とする意識のなか、敵に銃をむけながら死んでゆくジョーダンの格好良さ。

あの時の無謀とも見えるほどの純粹無垢な中学生の気持ちは大切にすべきだ。しかし東京オリンピック以前の時代、めったに映画なんか見たことなかった少年が、ハリウッド映画のヒーローとヒロインに自己同一化してしまうのは、いささか危険だということは、今なら誰でも知っている。

映画はエンターテインメントだ。だけど映画はマス・メディアであり、アメリカの 30 年代か

ら 60 年代にはかなり抑圧的なプロダクション・コードもあったし、いまもこれとは異なる形で規制があり、アカデミー賞にしたってアメリカ文化の世界に向けての広告なのだ。

さらに言えば、たとえば韓流ブームなのだけれど、カン・ウソク監督の『シルミド』が発表されたのが 2003 年で、NHK はドキュメンタリー『韓国・シルミド部隊の真実 国家に葬られた若者たち』を 2006 年 1 月 21 日に放映した。これらは政治的メディア戦略だ、ということはすぐに分かる。チャン・ドンゴン主演の『タイフーン』(2005)にしても、壮絶な南北問題への問いかけだ。

じつは『イーオン・フラックス』(2005)を観に行った理由は、人類救済のために撃ちまくるシャリーズ・セロンにあったが、2003 年の『モンスター』では、アイリーンというフロリダ州出身のハイウェイ売春婦を演じた。アイリーンは 6 人の男を殺害、2002 年に処刑。女性の死刑執行は、フロリダでは南北戦争いらい 3 度目のようだが、この歴史事実が映画として再現されると、それはそれでイデオロギー装置となる。<モンスター>は、1818 年のメアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』いらい歴史的に、女性を怪物にしてしまう男社会への批判である。

30 年前『誰が為に鐘は鳴る』に感動した中学生は、今や『Mr. & Mrs. スミス』(2005)の夫婦間バトルに感動する年齢になった。アンジェリーナ・ジョリーとブラッド・ピットの共演で、それぞれライバルの暗殺組織のエースという設定だが、それにしてもあれだけ撃ちまくってそれでも生き残る二人にリアリティを感じるの、映画は夢とおなじ願望充足だからだろう。

たしかに映画は世界を映す。映画を見ることは世界を見ることにかさなる。しかし映画は願望充足だったり、イデオロギー装置だったり、政治的戦略だったり、アメリカ文化の広告だったり、そんなさまざまな意味が交差する空間だ。

純粹無垢な眼差しで映画を見ることは、だからどこか危険なことなのだ。

もとやま ちとし(教授・アメリカ文学)